

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32518

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520996

研究課題名(和文) 祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究

研究課題名(英文) Folkloristic Studies on the Violence and Resolution in Japanese Festivals

研究代表者

阿南 透 (Anami, Toru)

江戸川大学・社会学部・教授

研究者番号：50255204

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本の都市祭礼を対象に、祭礼の中で起こる事故や暴力の解決法とその変化について、8つの祭礼を例に研究した。以前は祭礼における暴力が当然視され、当事者によって解決する慣例が存在したが、戦後は警察と行政の関与を招いた。このため多くの祭礼は暴力を抑制する方向に変化したが、一部の祭礼は、高度成長期以後、場所と時間とルールを決めて対戦する「競技化」の方向に変化したことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We studied the ways of resolution of troubles and violence in Japanese festivals. Formerly the violence in festivals were regarded as natural and resolved by the people concerned themselves. But after the world war second, police and government participated to the resolution. The effect of this regard by police and government, many festivals changed to control and restrain the violence. But several festivals changed to 'competition', fight under the determined rules.

研究分野：民俗学

キーワード：祭礼 暴力 喧嘩祭 自粛

### 1. 研究開始当初の背景

民俗学における従来の祭礼研究では、「暴力」は泥酔や猥褻とともに、非日常性の発現により共同体を再活性化する局面とされてきたが、具体的な事例に基づく研究は少なかった。これに対し本研究の参加者は、祭礼の場において、もめごとや逸脱行動などの暴力が、当事者にどう認識され、どのように対処されているか、そして外部との軋轢の中で祭礼がどう変化していくかを具体的に明らかにして、当該分野における研究動向をリードしてきた。

すなわち、祭礼において発生した暴力に対しては、まずは内容に応じた謝罪、祭礼への参加禁止、地域内での関係者の処罰など、当事者が「祭礼内の論理」と言うべき方法で問題解決を図ろうとしてきた。

ところが高度成長期以後、当事者の「祭礼内の論理」だけでは解決できない問題が発生し、マスメディアに非難される事例も増加してきた。神戸まつりにおけるカメラマン死亡事件（昭和51年）、明石市民夏まつりにおける観客圧死事件（平成13年）、青森ねぶた祭による「カラスハネト」の逸脱行動など多くの例がある。ここでは、もはや祭礼内の論理だけでは解決策を見いだすことが出来ず、危機に瀕した祭礼を存続するために、警察による規制や条例の制定など、さまざまな「祭礼外の論理」を導入して解決策を見いだした。これは、現代日本社会における日常性の論理が、暴力を非日常として許容する論理を圧殺した結果である。

一方、暴力の発生を一定のルール下で統御し、節度ある「形式化」とでも言うべき域に達した祭礼もある。たとえば山車の衝突が頻繁に起きる祭礼の中には、場所、衝突方法、対戦相手などの「ルール」を定めた上でぶつけ合うという、「ゲーム化」と表現しうる内容に変化したものがある。そこでは「喧嘩祭」などの俗称を喧伝し、「飼い慣らされた暴力」

を観光資源化する動きも見られる。このことは、近年顕著な、祭礼の「文化資源化」の動きと関連性がある。

このように、祭礼における暴力をめぐる問題にも複数の傾向がある。従ってそれらの共通点と相違点を明らかにするためにも、現状と社会的・歴史的背景の調査研究が必要である。しかし、こういった問題意識に基づく調査研究はいまだ活発とはいえない。

### 2. 研究の目的

本研究は、現代日本の祭礼における暴力の発生とその解決法について、具体的な事例を分析する。そして、祭礼内の論理による暴力の解決法と、警察の規制など外部の論理を導入した解決法を対比する。また、暴力を「形式化」して観光利用する祭礼にも目を向ける。これらを比較し分類して、祭礼の変化と時代的背景を明らかにする。また「安全」という日常の論理が「非日常」の祭礼に浸透しつつある様相から、民俗学の基本概念である「ハレとケ」等を再検討し、民俗学に新たな知見を開くことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究には、研究代表者である阿南透のほか、連携研究者として谷部真吾（名古屋大学）、中里亮平（長野大学）が参加した。まず、メンバーがすでに当該テーマについての研究を開始している祭礼として、青森ねぶた祭（青森県青森市）、森の祭り（静岡県森町）、見付天神裸祭（静岡県磐田市）、くらやみ祭（東京都府中市）、角館のお祭り（秋田県仙北市）を新たな視点から調査した。次に、その知見に基づき、比較の対象として、高岡市伏木の伏木曳山祭（富山県高岡市）、福野夜高祭（富山県南砺市）となみ夜高まつり（富山県砺波市）を調査した。また、築地だんじり祭（兵庫県尼崎市）六郷のカマクラ（秋田県美郷町）等についても調査を行った。

調査方法は、祭礼への参与観察とインタビ

ュー調査を基本とするが、あわせて文献資料調査を行い、インタビューでは得られない過去の経緯と、暴力に対する祭礼外部からの批判を明らかにした。

#### 4. 研究成果

まず、個別の祭礼調査から、以下の点が明らかになった。

青森ねぶた祭は、高度成長期から若者の参加が急増し、1980年代には「カラスハネト」と呼ばれる若者の急増とその逸脱行動が顕著になった。2001年にはついに祭礼の実施が危ぶまれる事態に至ったため、運行方式の変更という祭礼内部の工夫とともに、青森県・青森市が条例を制定し、警察による取り締まりを強化することで祭礼の存続を可能にした。本研究では、祭礼関係者が改革に追い込まれた経緯、外部との交渉経過、青森県と青森市における条例の制定、新運行方式への変更といった解決策が策定される過程を明らかにした。

静岡県の2つの祭礼、森の祭りで見付天神裸祭は、高度成長期に、マスメディアや警察などの外部機関から「暴力」的で不法な祭りと批判され、より「穏やかな」祭りへと変化していった。こうした変化の詳細を、関係諸団体へのインタビュー調査と、文字資料の分析から再構成し明らかにした。

角館のお祭りは、山車のぶつけ合いで知られるが、対抗関係にある町内会のぶつかり合いが「伝統」として許容され、警察の道路使用許可時間を越えて深夜まで祭礼が続く。その際に、特定の相手とぶつかり、他の相手を避けるための戦術や、他町内を通過するための作法、絶対に守るべきとされる規範も存在し、それらをうまく利用して望む相手と喧嘩することが腕の見せ所とされている。このように、今も祭礼内の論理が貫徹している。その一方で、観光化を志向する行政の思惑もあって、観光客に見せるための「観光ぶつけ」

を始めている。

くらやみ祭は、深夜の神輿渡御と頻発する喧嘩で知られていたが、高度成長期にマスメディア等から批判を受け、昼の祭りへと変化を遂げた。しかし近年、「暴力」の管理に成功したことから、時刻を繰り下げて夕方に実施している。こうした過程とともに、現在も頻発する喧嘩について、祭礼関係者内部での解決法の詳細を明らかにした。なお、2011年には東日本大震災の影響から祭礼を自粛した。このことは暴力のいわば裏返し現象として対比的に考察すべきものと考え、経過の記録と分析を行った。

次に、以上5つの祭礼で得た知見を元に、富山県における3つの祭礼、高岡市伏木の「伏木曳山祭」、南砺市福野の「夜高あんどん」、砺波市の「となみ夜高まつり」を調査した。これらは山車をぶつけあう祭礼として知られている。そこでは、古くは衝突が頻繁に、ある意味で「無秩序」に起こったため、死亡事故等のさまざまなトラブルが発生しながらも、祭礼内の論理により解決策を見だし、祭礼を存続させてきた。しかし戦後は、事故が発生すると警察や行政の非難が新聞紙上に掲載され、批判を受けたことが明らかになった。このため高度成長期に、衝突に関する了解事項が成立し、場所と時間を決め、一定のルール内でぶつけあう祭礼へと姿を変えていった。いわば「競技化」の方向を選択したのである。

これらの研究から以下の成果を得た。今回調査した祭礼の中には、場所・時間・ぶつける相手、ぶつける方法を事前に決めてルール化する、「競技化」の方向へ変化した祭礼があった。福野夜高祭、伏木けんか山、砺波夜高祭、築地だんじり祭などである。変化の要因として1960年代から70年代頃に、事故をきっかけとした警察の関与があり、事故防止策と道路使用許可をめぐる交渉で祭礼の方向性が決まっていた。その一方で、角館の

お祭りは、こうした方向に至らず、競技化しない祭礼として存続した。

参加者の小競り合いや群集の騒乱が目立つ祭礼の中では、青森ねぶた祭が、条例を制定して騒乱を抑えることに成功したものの、参加者と観客の減少を招き、観光という観点からは新たな問題が生じることとなった。一方、森の祭り、見付天神祭、くらやみ祭などは、外部からの非難により暴力が減少し、祭礼自体のあり方も変わっていった。

このように、暴力とその解決法という観点から祭礼を比較すると、警察や行政といった外部の介入により解決を図る祭礼の存在が目立った。そこでは死亡事故などの大規模な事故が転機となっており、その転機は 1960～70 年代にあったことが明らかになった。このことは、祭礼における暴力がもはや特別のものとして許容されるのではなく、日常の論理に従い、日常性の枠内に取り込まれたことを示すものであった。なお、主な成果については、冊子版の報告書を別途刊行した。

この点を踏まえ、次は暴力を統御しながらも興奮を誘発する手段としての「競技化」に焦点を絞り、祭礼研究を継続する予定である。

## 5. 主な発表論文等

### 【報告書】

『祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究-報告書-』2015

### 【雑誌論文】

阿南 透、2015「条例制定とその後の青森ねぶた祭」『江戸川大学紀要』25、pp.1-12、査読無

阿南 透、2014「『となみ夜高まつり』の成立」『江戸川大学紀要』24、pp.81-93、査読無

中里 亮平、2013「祭礼の自粛・中止に関する研究-被災地以外の地域からみた東日本大震災」『民俗学論叢』28、pp.33-45、査読無

谷部 真吾、2012「祭りの変化と社会状況

見付天神裸祭における 1960～61 年の変化を事例として」『名古屋大学文学部研究論集 哲学』58、pp.53-72、査読無

### 【学会発表】

中里 亮平、2013 年 10 月 13 日「戦う山車と進化する祭礼 秋田県仙北市角館のお祭りの事例から」日本民俗学会第 65 回年会、新潟大学

中里 亮平、2013 年 5 月 31 日「民俗芸能の「日常化」と文化財指定、学校教育への導入に関する研究 秋田県仙北地方「角館のお祭り」の「飾山囃子」の事例から」韓国高麗大学

中里 亮平、2013 年 1 月 28 日「東日本大震災と祭礼 東京都府中市大国魂神社くらやみ祭の事例を中心に」韓国中央大学日本研究所国際学術大会、韓国中央大学

中里 亮平、2013 年 1 月 20 日「被災地以外からみる東日本大震災 関東近辺の祭礼の事例から」相模民俗学会、神奈川県立歴史博物館

中里 亮平、2012 年 5 月 26 日「現代社会における「地域」の概念に関する考察」現代民俗学会、成城大学

中里 亮平、2011 年 10 月 2 日「震災と祭礼 自粛と中止をめぐる諸問題」日本民俗学会第 63 回年会、滋賀県立大学

## 6. 研究組織

(1)研究代表者 阿南 透

江戸川大学・社会学部・教授

研究者番号 5 0 2 5 5 2 0 4

(2)連携研究者 谷部 真吾

名古屋大学・文学部・助教

(平成 26 年度は無所属、研究協力者)

研究者番号 8 0 5 1 3 7 4 6

連携研究者 中里 亮平

長野大学・講師

(平成 25-26 年度は韓国中央大学講師、研究協力者)

研究者番号 00601171